

研修報告書 No. 1

研修先： 嶺北中央病院

2021年4月19日～5月23日まで高知県嶺北中央病院で研修をさせていただきましたので報告します。私は生まれも育ちも東京でしたが、将来救急医として病院前診療に携わりたいという思いが強く、県外での地域医療の実情に関心がありました。地域医療研修先として岩手県、高知県、東京都の選択肢があった中、未踏の地で医療をみてみたいと思い高知県病院群を選択しました。

高知県の医療に触れて真っ先に感じたのは、各病院の役割分担が比較的明確であるという点です。嶺北地域に住む人々の拠り所として外来から救急対応まで担う嶺北中央病院と、高知県の中央で高度医療を担う高知医療センターや近森病院、高知赤十字病院はドクターヘリや救急車でアクセスが可能で双方の連携はスムーズだと感じました。東京は病院アクセスに困らないと思われがちですが、2次～3次救急の類似した病院が密集しているため、「どの病院でも見られるだろう」と受け入れを断られることも少なくありません。結果患者のたらい回しが起こったり、2次救急が2.5次元救急になったりとその線引きも曖昧なことが多い印象です。そのため、自分の病院で完結できることとそうでないことを判断し各々の役割を遂行する、高知県のよどみない医療連携に刺激を受けました。

嶺北中央病院の研修では、病棟・救急車対応のほか、自分の研修病院ではなかなか経験することのできない外来診療や訪問診療に携わらせていただきました。嶺北中央病院は医療療養病棟も含め99床の入院病床を持ちながら、地域患者のかかりつけとして日常生活を見守る役割を担っており、高度急性期病院で研修してきた私にとってはすべてが新鮮で、日々学びの連続でした。

外来では我慢強い性格の方が多いいのか、発症から数日後に病院を受診され病気の本質がわかりにくい方や、施設入居中の方で自ら症状や経過を訴えることができない方が多い印象を受けました。その中でいかに所見を正しくとるか、red flagを見落とさないか、という視点を学ぶことができました。私の研修病院では画像検査や血液検査の閾値が低く、漫然とオーダーしてしまうことが多かったのですが、嶺北中央病院での研修中はきちんと身体診察をとったうえで、ある程度の鑑別を挙げて「この人にとって必要なことはなにか」「この検査によって得られる結果で何を明らかにしたいのか」を考えながら過ごす時間が多かったように思います。

高齢化という壁も目の当たりにしました。入院がADL悪化のトリガーになりかねない一方で、公共交通機関が決して多くなく受診へのアクセスも遠のきがちな患者さんを帰宅させて良いのだろうか、と悩む場面も多くありました。「高齢の患者さんにとって、治療や検査が必ずしも幸せとは限らないのでは」という長年の疑問に、改めて直面した気がします。

答えにはまだ辿り着けていませんが、嶺北中央病院の先生方の背中を見ていて、患者さん一人一人に沿った医療を提供することが患者さんの人生の QOL に繋がるのではないかと考えるようになりました。そのためにはその患者さんのバックグラウンドや周囲の人々の状況を把握する必要があり、一朝一夕にして成り立たない医療の信頼関係を築く大切さを学びました。

今回 COVID-19 流行という厳しい情勢の中、快く受け入れてくださった佐野院長先生、嶺北中央病院の先生方、医療スタッフの方々、高知医療再生機構の方はじめ、すべての関係者の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。